






第3回「広葉樹二次林の施業上の取扱いに関する検討会」(結果)

日 時	令和5年10月10日(火)～11日(水)
場 所 等	飛騨森林管理署管内(宮・庄川森林計画区)
出席委員	岡野 哲郎(信州大学 学術研究院 森林・環境共生学コース 教授) 酒井 武(国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 森林植生研究領域 チーム長(針広混交林施業担当)) 竹田 慎二(飛騨市役所 農林部 林業振興課長) 横山 隆一(公益財団法人 日本自然保護協会 参与) (五十音順、敬称略)
検討内容	1 飛騨市における広葉樹天然林施業実行箇所の視察 2 国有林における広葉樹二次林の現地検討 3 検討会の取りまとめの方向について(構成案)

1 飛騨市における広葉樹天然林施業実行箇所の視察	
視察箇所	飛騨市広葉樹資源活用モデル林整備事業箇所(育成木施業)
	平成28年度に天然林の間伐施業を行った箇所。森林の価値を高め、またその過程で伐る木を付加価値の高い材として使うことを目指して施業を実施。 
視察箇所	飛騨市広葉樹資源活用事業・広葉樹天然林試験伐採実施箇所(更新伐)
	育成木施業における課題を踏まえ、令和3年度に帯状(伐採幅50m)の更新伐を行い、タワーヤーダにより架線で搬出した箇所。伐採後は、125か所のモニタリングプロットを設置し、更新状況調査を実施している。更新は順調に推移。 

2 国有林における広葉樹二次林の現地検討

検討箇所	向洞国有林 3124 は林小班ほか	
林分状況	スギ及びカラマツを植栽した人工林内に広葉樹が侵入して針広混交林化している林分 面積：16.74ha 林種（細分）：育成天然林 林齢：69年生	
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・当該林分における間伐等の施業の要否は、林内の下層植生がどの程度あるかによる。後継樹が成育しないのは林内が暗いためである。 ・針広混交林を目指す場合、ある程度の密度の針葉樹を残す必要があることから、残す針葉樹を決めた上で、林床が暗くて更新が適切に進まない箇所においては、その周辺のスギやカラマツ等を強度に間伐することになる。 ・間伐では後継樹を育てることは難しい。通常の間伐によって、針広混交林化を進めていくのには無理がある。 ・主伐は天然更新を担保できる場所なら良いが、そうでなければ手を加えないという判断となる。 ・このような林分に対して、試験的に施業を行うことができて、事業ベースで施業を行うには、データが少なくハードルが高い。 ・天然更新等に関する国有林でのデータがあれば、民有林関係者としては非常にありがたい。 	

検討箇所	平湯国有林 2195 林班は小班、ち小班	
林分状況 (は小班)	<p>カラマツ等の針葉樹を植栽した人工林内に広葉樹が侵入して針広混交林化した林分</p> <p>面積：1.74ha</p> <p>林種（細分）：育成天然林</p> <p>林齢：76年生</p>	
概要 (は小班)	<ul style="list-style-type: none"> ・カラマツは加湿に弱い。少しでも滞水するような場所だと一気に枯れてしまう。この場所は過湿で活着しなかった可能性が高い。植栽前も元々木があまりなかった場所と思われる。 ・人工林化がうまくいかず、立木密度が低い状態であるが、現状に対して手の入れようはない。 ・手を加えて価値を高めようにも加えようがない。林分の成長を待つ段階だと思う。 ・このままの状態で施業を行わなくても、この場所の現在の生物多様性のありように対してマイナスなことが生じるわけではなさそうなので、わざわざ手を入れる必要はないと思う。プラスになる手の入れ方（施業）はないと思われる。 ・施業により空間が生じることで樹勢が落ちたりすることもある。 	
林分状況 (ち小班)	<p>過去に薪炭利用した後に成立したと思われるブナ、ミズナラ、ウダイカンバ等により構成される広葉樹二次林</p> <p>面積：1.54ha</p> <p>林種（細分）：天然生林</p> <p>林齢：74年</p>	
概要 (ち小班)	<ul style="list-style-type: none"> ・当該林分は林相としてまだ若く、このままで手を付けない方が良い。北東向き斜面なので、比較的様々な種が混ざりやすい立地であり、実際様々な種が入っており、今後どのように遷移するのか興味深い。 	

3 検討会の取りまとめの方向について（構成案）

概要

- ・森林の多面的機能の中身を体系的に整理したうえで、全体として多面的機能のどの要素を重要視するかや、そのうちの物質生産機能をどの程度重視するかを説明する必要がある。生物多様性保全機能の中身をきちんと説明することで、「放置」という表現がいわばほったらかしではなく、自然に委ねた状態として維持しているという表現ができるようになるのではないか。
- ・森林の構造や施業履歴とどの多面的機能を期待するのかをうまくマッチングさせることが重要ではないか。
- ・災害防止を優先する箇所は山地災害防止機能が必要となり、飛騨市の施業箇所の場合は用材として使いたいという経済的目的もあるので物質生産機能が必要となる。それぞれのニーズと森林の類型をクロスさせて検討するのがよいかもしいない。
- ・局全体の広葉樹二次林の取扱いの方針を立てるだけでなく、広葉樹を活かした森づくり、いわゆる飛騨市がやっているような取組を国有林の条件の良い場所で進めて、新たな価値や産業の創出まで踏み込むところまでできたら良い。大きな方針だけ作って、現場レベルで施業が進んでいかないことにならないようにすべきである。
- ・現状の資源量（樹種、蓄積）を把握した地域があるとよい。
- ・現況把握はとても膨大な作業なので、手を入れる目的が明確化された林小班をまずは対象とするのがよい。
- ・林道からの距離などをはじめとした地利が良くないと、調査も利用もできない。まずはその点を洗い出す必要がある。
- ・これまでの施業履歴別の分類（薪炭林、人工林由来、漸伐施業）になっているが、その中で施業を行う方が良い林分を抽出する場合、履歴別に抽出する方法と、どのような履歴なのかに関わらず抽出する方法の2通りがあると考え。施業することで生物多様性が高くなるような林分はそうはないと思う。どのような状況になった林分において積極的に施業すべきかを考える必要がある。関西の里山のように、毎年手入れをしていた状況が変化しアンダーユースになった林分に対する施業と似ている箇所はないか、抽出して探していくのではないかと考えている。
- ・飛騨市の取組は、過疎化や人口減少といった地方自治体の抱える課題を踏まえて、産業として広葉樹活用を図ることがベースにあることから、収穫を前提とした施業になっているが、その一方で保全も念頭に置いて、着実に更新を図ることを前提としている。
- ・近畿中国森林管理局の「里山広葉樹林活用・再生プロジェクト」と本検討会の目的の違いも整理してもらいたい。